

No. 1016

# 谷川岳の夏

上越国境・谷川岳も7月に入り、ようやく夏山シーズンをむかえた。7月1日、山開きの日、入山者は2,000人を越えた。若者達は頂上めざして一步づつ尾根を登っていく。

若者の心をひきつけて離さない谷川岳。

多くの岩壁がそそりたち、剣岳、穂高と並んで日本三大岩場の一つに数えられている谷川岳は「魔の山」としてそびえたつ。

変わりやすい気象変化による凍死、落石、雪崩、クレバスなどへの転落岩場からの墜落等によって命を失った若者の数はこれまで600人をこえる。

これは世界一だという。

一の倉沢の大雪渓で続けられている仲間の遺体搜索。

今年の冬、雪崩にあい遭難した2組のパーティーだ。一人はみつかったもののまだ3人がこの雪渓の中に埋まっている。

雪渓や沢につくられた仲間の死をいたむケルン。それでも若者は山に登る。

自然の力をまざまざとみせつけてくれる谷川岳。

慰霊碑をもうこれ以上建ててはならない。

# 車 社 会

マンモス都市・東京、その真中を伸びるハイウェイ、疾走する車群。現代社会において、車は機械文明の象徴として存在する。

日本の自動車保有台数は2,400万台、世界第二位である。

華麗で優雅な姿を誇示する車。それはたくましい男性のように、あるいは美しい女性のように輝いている。

日本中をおそう交通事故、排気ガス公害、それも車の魅力の前には無力だった。

今、都会の街を車は我がもの顔に、得意顔に走り抜ける。自動車業界は自己の力を誇示して次々と新しい車をり出す。

車でいっぱいになった都会は人間の歩く道は言うまでもなく、車の走る道路さえない。

そのうえ、機械文明の限りを尽くして作られた車はすぐに流行におくれ、ボンコツ車へと変身する。

その数は年間180万台を越える。

人間が作り出した車社会、一台の車がたどる運命は人間のそれに似ている。